

令和2年10月27日 教育委員会報告事項についての質疑応答（要旨）

（報 告）

ア 令和3年度浜松市奨学生を選考結果について

（教育総務課）

※教育総務課 就学支援担当課長から資料に基づき説明。

（渥美委員）申込者の増員の要因はあるか。

（就学支援担当課長）これまでは4月のはじめに大学生になる子を対象に4月に募集、採用をしていたが、前倒しをして前年度の7月から9月に予約採用とした。これは日本学生支援機構が同じ時期に募集しているため、そちらの制度と比較検討していただき、より良い方を選んでもらうという趣旨もあった。その結果昨年度より応募が30%増えた。

（安田委員）選考会に出席した感想だが、高校生の申請状況については、市立高等学校の生徒が多かった。それは、市立高等学校に対して1人1人にパンフレットが行き届いていたことによるものではないか。県立高等学校に対しては伝え方が不十分のため、そこを事務局としても考えていただきたいと感じた。申請者が増えた申請時期の前倒しは非常に良い取組だと思う。また、例えば片親であるとか収入が少ない等の困窮している家庭の応募が本来ならもっとあってもいいのではないかと思う。まだ浸透していないのか、あるいは貸与ではなく償還のものだからではないかという思いもある。それでも困っている家庭に制度の周知を図れると良いのではないかという意見が選考会で出た。

（渥美委員）募集の告知の工夫点は何か。

（就学支援担当課長）市立高等学校の3年生向けだけではあるものの、すべての学生に1人1枚リーフレットを配布した。他の県立高等学校に対しては、ポスターと募集要項を10枚程度配布し、希望した学生に配布するよう学校へ依頼した。広報はままつにも掲載している。今年の新たな取組としては、浜松市の公式TwitterとFacebookに締め切りの1カ月前に掲載した。

イ 令和2年度浜松市優秀教職員表彰について

（教職員課）

※教職員課長から資料に基づき説明。

（安田委員）表彰を受けた際の具体的なメリットはあるか。

（教職員課長）教職員の免許の更新講習は10年に一度義務付けられているものであるが、県教育委員会にも諮り、浜松市の選んだ優秀教職員に関しては免許更新講習が1回免除される。

（安田委員）時間的にも金銭面においてもメリットがある。これはどこかに文言として

書いてあるのか。

(教職員課長) いいえ。

(安田委員) 実益があることをもっと表に出していいのではないか。それだけの価値がある。

(教職員課長) 周知の方法について検討する。表彰式の折に公開できるものであれば、広く教職員に伝わる。

(安田委員) 表彰式も、在籍校の校長など参加できる人はできるだけ参加できるといいのではないか。教育委員も必要があれば参加するし、校長先生にも来ていただきたい。付加価値が付けられるといいのではないか。

(渥美委員) 表彰により給与に影響はあるか。

(教職員課長) 直接の影響はないが、教職員の評価制度が今年度から本格稼働しており、この評価制度において表彰は参考データとなる。結果、昇級につながる可能性がある。

(渥美委員) 表彰されるのは全教職員の何%くらいか。

(教職員課長) おそらく1%くらいではないか。正確なデータは出していない。

(田中委員) 具体的なメリットがあることは、若い先生のモチベーションに繋がって、自己研磨するきっかけになるのではないか。本制度を若い先生に知っていただくことが大切ではないかと思う。

ウ 令和3年度浜松市立幼稚園園児募集の結果について (幼児教育・保育課)

※幼児教育・保育課長から資料に基づき説明。

(黒柳委員) 保育所の需要が増えているためそちらに園児が流れる理由は分かるが、今後市立幼稚園の園児数の減少傾向は止まらないと考える。その時どのように対応するのか。

(幼児教育・保育課長) 全体的に小規模化していく中で、園運営や地域の事情、未就学児の人数の状況など地域と話をしながら、個別に園ごとに検討していくことになる。

(黒柳委員) 地域になくってはならない園も多々あると思う。地域の方と話し合いをしながら園の運営、残す、残さないの判断については、慎重に話を進めていただきたい。

(渥美委員) 市立幼稚園の園児の減少率は、子供の減少率よりも高いのか。

(幼児教育・保育課長) 子供の減少数と園児数の減少数がほぼ同じである。

(渥美委員) 保育所が増えているということだが、その分市立幼稚園の人数が減っているということではないのか。

(幼児教育・保育課長) 私立幼稚園を考慮しても、市全体で幼稚園の園児数が減っている。

(渥美委員) 3歳よりも前に保育園に行く家庭は、3歳になったからといって市立の幼稚園に切り替えるということは普通はしないと思われる。3歳よりも前から浜松市立の幼稚園に入園できる制度は検討しないか。

(幼児教育・保育課長) 保育園は現在のところ、0歳児の入所は伸びていないが1歳児の入所人数は毎年増えている傾向にある。早々と保育園を選ぶ親は多い。一方で、幼稚園は2歳児保育から可能になる。しかしながら、私立幼稚園でそのような制度を導入している状況もあるため、市立幼稚園については現状3歳の誕生日を迎えた翌年4月からの入園を継続したいと考えている。

(渥美委員) 基本的には今の傾向はこのまま続きそうということか。

(幼児教育・保育課長) その通りである。最近の保育園の入園の伸び率などを見ても、昨年度の4月から今年度の4月にかけて保育園の入園児が400人ほど増えている。全体でそれだけ増えていて、年度末までにはさらに伸びる状況になるため、やはり保育の需要が高まっていると捉えている。

(渥美委員) 端的に、保育園と幼稚園の教育面での差はどこにあるのか。

(幼児教育・保育課長) 国が示す要領上は3、4、5歳は同じ教育をするということが示されていて、教育に対する考え方は基本的には変わらない。

(渥美委員) 名前が違うだけでやっていることはほとんど変わらないということか。

(幼児教育・保育課長) 国が示す指針では、同じものを目指している。

(こども家庭部長) 補足として、幼児期に育てたい力ということで、今幼児教育推進協議会の中で、保育所やこども園や認可外も含めた中で3歳児以降伸ばしたい力や方針をみんな同じ意識を持ってやっていきたいということで決めている。法律上では設置の基準は違っていても、3歳児以降については同じような力を伸ばして学校につなげていきたいという思いでやっているのだから、教育内容としては同じレベルで学校につなげていけたらと思っている。

(渥美委員) 小学校入学時に、保育所組と幼稚園組で違いを感じることはあるのか。

(教職員課長) 子供の個々の違いが大きく、学校種でということではない。園によって特色があり幼稚園と保育園の違いを特段感じたことがない。

(渥美委員) 差があるのに違いを感じてないだけなのではないか。それは問題である。浜松市は何を目標に幼稚園教育をやっていくかビジョンをまた別の機会に聞きたい。

(安田委員) 竜川幼稚園は令和3年度は休園ということか。それが何年か続けば廃園となるのか。

(幼児教育・保育課長) このまま誰もいなければ休園となる。廃園の手続きをするかどうかは、竜川幼稚園は非常にエリアが広いので、代替となる園があるかどうかを慎重に検討し、地域と話し合っていく必要がある。

(安田委員) ゼロになったので休園ということは致し方ないと思うが、学校や幼稚園が開いていないということは地域の過疎化が進んでしまうため、慎重な議論をお願いしたい。浦川幼稚園児は令和3年度は2人で、園児同士の遊びや様々な経験ができず、大人が知らない部分での我慢を強いらせることがつらい。突拍子もない意見かもしれないが、週に2回はバスなどで近くの幼稚園に連れて行き、大人数での生活を経験させ、少人数の良さと大人数の良さをどちらも享受できるという、園ならではの良さをアピールすれば保護者も安心するのではないか。少ない園の子たちもどうやって増やすのか考えながら、幼児期は触れ合うことが大切なのでどこかに連れてって行くようなことを考えていただきたい。

(幼児教育・保育課長) 浦川幼稚園の2人については、原田橋が開通する前に入園したということで、他の園に行くことができなかった。園長は佐久間幼稚園と兼務しているため、実際の実組として、佐久間幼稚園や小学校と交流を行い機会を設け、予算措置も行っている状況にある。浦川幼稚園では佐久間幼稚園と今年度8回ほどの交流を計画しており、また、月1、2回ほど浦川小学校に行き交流するほか、小学生が幼稚園に来て園児と交流することもあるとのことである。

(安田委員) 今、天竜や春野に若い夫婦が移住している。選んでもらえるようにそれを表にアピールできると良い。

(渥美委員) 就学前教育は人間形成の土台となるため大切である。どのように人と関わることの工夫を幼稚園、保育園で行わないと大人にまで影響する。ぜひ工夫していただきたい。

(神谷委員) 幼稚園に行っている子たちは3歳児の中で保育園、私立、市立に行ってい

る子というように分割してデータを見ないと減少率は見えにくいと思うので、機会があれば出していただきたい。幼稚園の教育は大切だが、選ぶのは保護者がほとんどだと思うので、保護者にどのように訴えていくかがすごく大切である。子供が多いところに預けた方が色々な教育や経験ができるし、児童数が0では行かせにくいと思う。アピールの工夫が必要かと思う。

(黒柳委員) ひと昔は地域の幼稚園に通っていたが、今は色々な幼稚園や保育園が選択でき、市立幼稚園のよさはすごくあると思う。今PRはどのように行っているのか。

(幼児教育・保育課長) 選択肢があるエリアとないエリアは違う考え方をしていかなければいけない。施設の選択肢がない中山間地域などでは、施設を維持していくために集団教育のための環境をどのように担保していくかが重要である。園児数が一人でも良いというわけではなく、複数とのかかわり、異年次との関わりがないと小学校につなげていくための力がなかなか付きにくいということも言われているので、そのような環境を中山間地域ではどう確保していくかを考える必要がある。一方で、選択肢があるエリアについては、あくまでも保護者に選択していただく施設であるため、家庭の就労状況などライフスタイルや教育観に合わせて率直に選んでいただくことが必要である。特段市立幼稚園をPRしているということはない。

(黒柳委員) 各園に様々な特色があると思うので、それを保護者によりよく伝えて少しでも人数が増えると良い。